## (八) 演說第拾一

四月十三日の月曜日に、午前九時から白館(ホワイトホール)に於て第二回の諮問會議が開かれた、オリヴァーは委員長ホッパートロックを呼びかけて次の演說をなした。〔譯者曰、此演說筆記を略す、彼は此演說に於て未だ自己の態度を鮮明にしなかつた〕。

月曜日は此演說のみで會議を閉ぢて、明日の三時より次回を開くことにし、其迄に各員尙ほ充分に勘考を重ねることにした。

守護官は此問題について、まだ却々(なかなか)決心の着く處まで行かぬ、肯定(イエス)の氣持と否定(ノー)の氣持が半分々々に彼の心を占めて居ると云ふ有樣で、自己の意志を宣明する段には未だ至らぬ、此演說にある通り、曖昧模糊(あいまいもこ)たる自己を宣明するより外に何等宣明すべきものはない。

二月の末より既に六七週間と云ふもの、彼は此未決定の時を有ち、國人は皆揣摩臆測の中に彼の返答如何を待つた、處が彼はまだ〳〵確答をなし得る處ではない、何となれば王號問題は實に大問題である、彼の擁護せる國民のため主義の爲に重大なる問題である、(玄かし彼自身に取りては比較的輕い問題である)之を要するに彼の此問題に對する態度は、例に因て全然勇氣と率直に充ちた者であつた。

さて翌日及び翌々日とも、守護官が不快であつたゝめに諮問會議は開かれず、木曜日に至てやうやく第三回目の開會を見た、此會合に於てグリン、レンサル等六人の貴顯が交々(こもごも)立つて、月曜日のクロムエルの演說を辯駁し、博學と冗長とを遺憾なく發揮した、こゝに掲げる値は少しもない。ホッパートロックは論じた「クロムエルが王號を拒むのは議會の忠告を拒むことで、英國に於て議會の忠告を拒

んだ王は未だ曾て一人もない」と、或人は曰ふた「王號を受るのはクロムエルの義務である、願くは義務を怠る勿れ」と。そこでクロムエルは、大問題である故明日まで熟考の時間を與へて貰ひ度いと申し出し、明日午後三時より第四回目の會合をすることに定まつた。

## (九) 演説第拾二

クロムエルが復不快であつたゝめ金曜日の會議は中止となり、月曜の午前に開かるゝことゝなつた、即ち一六五七年四月二十日の午前十時より開會せられ、九十九人の委員の前にて、守護官は前回の委員側の議論に答へて次の演説をなし、其未決定なるまゝの心持を表はした。

諸卿よ、

王號問題に關する諸君の御意見を前回に於て承りましたが、諸君の御意見については私は出來るだけ考察を致しました、諸君の御議論は大體に於て既往と等しく、二三の新しい點があつたのみだと思ひます。それで我等の相談も近頃のやうな進み方では、諸君の貴重なる時間を浪費するなきかを憂ひまする故、唯新しい論點と認る事項についてのみ、數言以てお答へ致しませう。

諸君は、此問題に關する議會の決定そのものが甚だ有力である由を申されました、……又私は英國の王さへも未だ曾てなさなかつた處の、「議會の忠言を拒むと云ふこと」を敢てせんとするとの御警告もありました〔ホイットロック卿に眼で一寸挨拶しつゝ云ふ——卿の重くるしい顔がそれに答へて微笑しようと力める〕。成程、もし私の場合が曾て此國の主權者たりし人々の場合と、事情

を異にして居なかつたならば、私の議會の意志に背くことは大失錯であつて、後の批難を受くることでありませう、去かし彼等は王家に生れて、生得權に由て王位に即いたものであります、又議會の權威に基いて主權者となつたものでも、豫め主權者たるの稱號を得たものです。されば彼等が王號を拒むのと私が王號を拒むのとは、大に事情を異にして居ます、私が之を拒みて議會の意志に背いたとて、彼等が王號を拒んだ（もしかゝることがあつたとすれば）程には、私は批難されぬ筈だと思ひます。

此稱號を受くるのが私の義務であると云ふ御意見もありましたが、人苟くも自己の荏弱、無能、缺陷を知れる上は、神と人との間の外に義務と云ふものはありますまい、彼が神に賴らずしては事を爲す能はざるを知れる上は、神に對しての義務を自覺することはありますが、人と人との間の義務は今回の如き場合に適用せらるべきではありません、それが義務として私の負ふべきものやら、受けて私の過誤となるものやら、私にはわかりません。

以上、甚だ散漫に申し上げて申譯ありませぬ〔譯者曰、原演說は慥かに散漫にして、彼が衷情の秩序なき披瀝である、成語をなさざる句の多きこと實に驚くべき程である、云ひかけたことを中途でやめにしてしまふことも數回に止まらぬ、言辭のみより見ては蕪雜を極めたものである、譯者は辛うじて其大意を譯し得たのみである〕、又病氣のため會議を怠りましたことも御詫申します。私は自分の思考を皆樣の前に開陳致しました、皆樣は御論據を示して下さいましたし、私も自己の論據を申し述べました、前回に於て用ひし議論を繰返さずして、其以後に於て私の心に起つたことを、病苦と心勞とを冒して申述るわけであります。諸君の提出せられた理由を以てしては、私は到底王位を受くると云ふ自覺には

達せられぬと云ふことを、前回に於て既に申し上げました故、實は今日は目下の私の苦痛と煩勞とを申し述べて、御返辭に代へよつと願つたのでありました。

私の意向、目的はたしかに國民に對して忠實であります、僞りはありません、御恩惠に因て將來も然らんことを願つて居ます、私は王號を受けようが拒まうが、此國民の自由を害ふやうな事は致すまいと心掛けて居ます、そして神樣が此仕事に必要なる精神と元氣とを取り去り給ふ時は、何卒誰人も私の死ぬまゝに棄てゝ置いて下さい、私の世を去るのを許して下さい！

そこで今迄の討論は先づその儘として置いて、諸君よりの『請願及び建議』の中に於て、王號問題以外の條項について少々考へて見たいものです。之等の中或は一般的のものあり、或は特種的のものあり、一として重要ならぬはありません、稱號問題は何れに定まらうが、之等は疑もなく其目的に應ずるだけの結果を收め得ることでありませう、但し諸君の配慮と忠良とを以てしても、全然他よりの激勵や忠言を要せぬと云ふことはないと思ひます。

それで之等御提議に對する卑見を記した書類が茲にあります、諸君が之を讀んで下さらんことを私は願ひます〔ホヰットロックに書類を渡す〕。それ等について尙申し上げ度いこともありますので、明日午後三時より再び會合致し度いものです、そして相互に意見を交換して、神の榮光と國民の善益に資する事に於て一致し度いと私は希つて居ります。

此演說の濟んだ頃はもう晝食に近かつたので、此日の會議は之を以て結了し、明日再び會合することになつた。

或人は記した「我等は守護官の演說を聽いて大に失望した、相變らず不明瞭且亂雜な演說で王號を受ける意か受けぬ意か少しもわからぬ」と。

勇め、我守護官よ！　閣下は未だ知らぬけれども、丁度此時海將ブレークはサーンタクルースの港に於て、閣下に代はりて西班牙人に對して猛擊の眞最中である、――守護官が右の演說をして居る同時刻に、彼方太西洋上テネリーフ島影の下に、英の海王ブレークに由て最も敢爲なる行爲が實現されつゝあつた。即ちブレークは英艦隊を率ゐて西班牙の沿岸を游弋しつゝ、例の如く敵や來ると張目しつゝあつたが、西班牙の一艦隊がカネーリー群島まで歸航し來つて、テネリーフ島サーンタクルース灣に淀泊中なりとの報を耳にした、ブレークは直に進で此月曜の朝テネリーフ島に着し、見れば銀を積める船と戰艦と合せて十六隻の西班牙船艦がサーンタクルース灣内に淀泊して居つた。灣は蹄鐵の形をなして入口小なるに、其入口に砲臺あり、內部にも砲臺あり、砲臺の數は總計八にして巨砲を備へて防備し、戰艦は並列して一令下らば直に火蓋を切らんと準備してある、之に入るは飛んで火に入る夏の虫であるが如くに思はれる。ところがブレークは敢然として砲擊を開始し、勇戰奮鬪我雷を以て敵の雷を壓し、遂に砲臺を沈默せしめ、敵の船艦を悉く燒いて之を全滅し、然る後悠然として引き揚げた、之がブレークの最後の奮鬪であつた。――彼は三年間の辛勞に困憊して、後間もなく英に向つて歸航し、ブリマス沖まで來つて其儘艦上で永眠したのであつた。

之を要するに僞基督たる西班牙はクロムエルと云ふ手剛い敵を有つたわけである。尙ほ此四月の頃に於て英にては六千人の陸兵を整へて居たが、之は佛と結びて西班牙兵をネザーランヅ（和蘭地方）

に攻擊し陸上に於ても亦西班牙を懲らさんためであつた、去る三月英は佛と向ふ一年間の攻守同盟を結んだのであつた、レーノルヅを此遠征軍の指揮官とし、モーテーグは海軍を率ゐて之を援助することになつて居た。それは扨置き、此王號問題がどうにか定まらねばならぬ、萬人其定まらんことを願つて居る、此書の作者も同樣である！　例の委員連は廿一日（火曜日）の午後三時より復會議を開くことになつて居た、困難なる征戰や實際的事業のなすべきもの多かるに、彼等は彼等の空虛なる議論のために集るのであつた。

## （一〇）演說第拾三

此火曜日の會議に於ては、クロムエルは王號問題には觸れないで、『請願及び建議』中の他の條項についてのみ意見を吐露した、彼は之等條項を以て『請願及び建議』の根幹なりと認め、王號問題を其枝葉なる者となして、一時打棄つて置いたのである。此長々しい演說に於てクロムエルは王位の問題には言及せずして、ために此問題は一寸も進まなかつたのである、或記者は「唯不得要領なる演說のみ、益々出でゝ益々支離滅裂なり」と云ふて居るが、決して譯のわからぬ演說ではない。守護官は先づ自己の過去の行動に關し、又英國をして今日あるに至らしめし神恩の次第に關して覆說し、次に今日國家をして安全ならしむるに缺くべからざる要素如何を說明し、進んで社會風敎のために傳道問題に益々留意すべきを說き、國庫補充の緊切なるを述べ、最後に斯樣な意味を廻りくどく暗示した、「之等重要なる條項に關する私見についての諸君の返答を承つた上で、かの枝葉なる問題（王號を占め王衣を纏ふ等のこと）に關して、自分として爲し得べく神に於て許して下さるだけの返答を致さう」と。

〔譯者曰、此演說は議會の『請願及び建議』中、王位問題以外の條項に關してのクロムエルの意見を吐露したものであるが、原著者が、前段に紹介した通り、自然根本的の問題にも言及してある、此長き演說は煩雜にして讀者に興味少かるべく、且其精神に於ては既に度度クロムエルの演說せし處と等しき故之を省く、讀者は前頁に譯載したる原著者の紹介を以て滿足せられ度し〕。

九十九人の委員は此演說を聽いて大に失望して散會した、近代人も大分倦怠したであらう、勇め、我友、陸が見えるぞ！

次の十日間、クロムエルは沈默を守つて居たが、此間に彼は大に默想したのであらう。議會の方では、右の演說中に示されたるクロムエルの意見を出來るだけ多く採用するのには、如何やうにすべきかと考究を重ねて、熱心に『請願及び建議』の修正をなしつゝあつた、又守護官と參議院より出でたる法案について審査しつゝあつた。

五月一日（金曜日）、「請願及び建議」の修正完了して、九十九人の諮問委員は之を携へて守護官に謁見した、守護官は之に對して、事は重大であつて思考の時を要する故、最後の決答をなすために會合する日を今日豫定することは出來ぬが、ともかくも成るべく早く其日を御知らせすると答へた。

それで此王號問題は尙ほ疑問の雲に包まれて居る、多くの人はクロムエルが之を受けるだらうと想定して居たが、彼等にも我等にも守護官が心中の經過は全くわからない、軍隊の一部――一部と云ふても王號などより値のある一部――は反對したと云ふ話である、兎に角守護官は愈々決斷する處あつて次の如く返答した。その返答が左揭の「演說第拾四」である。

# （一一）演説第拾四

一六五七年五月八日（金曜日）午前、議員全部は白館に於てクロムエルに謁し、王號問題についての最後の確答を聽いた、讀者も今之を聽いて、之を以て此問題の終結とせられよ。

ホヰットロックを委員長とする九十九人の委員は、昨七日クロムエルに謁して書類を呈した、之は既に修正したる『請願及び建議』に更に最後の修磨をかけたもので、之にてクロムエルの意見が大分採用せられたわけなのである、そして彼等委員は守護官の最後の確答の暗示をだに得べきかと望んだ。守護官は自己の遲滯を謝し、明朝再び來らんことを求めた、それで翌金曜日午前にクロムエルの次の演説があつたわけなのである。

議長閣下、

私は諸君の意向を言明したる昨日御提示の書面に對して、茲にお答へ申さうと欲ひます。

此問題は議會に大なる面倒を與へ、且長き時を費しました（二月廿三日より五月八日まで、十週間以上）、まことにお氣の毒に存じます、私も亦これがために時と思考とを費しました、で、私自身が此時間浪費の因となつたのである故、今日は極て簡單に申し上げようと思つて居ります。

私は諸君の新政制案（請願及び建議）の全部について、出來るだけ考察を重ねて、既に卑見を開陳する處ありましたが故に、既に一旦申し上げた點は茲に繰返へさぬことに致します。諸君の案たるや、國民の權利たる處の公權及び自由に關して確實なる決定を

目的とするものであると私は思推致します、私は今日まで國民に之等權利を充分に得しめんと努めた積りでありますので、諸君が私を以てかの國民の權利剝奪者の一人と見做さゞらんことを希望致します、又「良心の自由」と稱せらるゝ處の、かの大なる天賦の信仰的自由に於ても、誠直なる人々の安全のために十二分に供與せられて居るのであります。之等は根本的の大事であつて、是れ甚だ以て貴むべくして、議會の成案として寔にふさはしきものと、私は之等に對して證明を與へます、此種の證明は既に私の既往に於て爲した處、又神が私を此世に生かし給ふ限りは爲さんと欲する處であります。

さりながら、諸君の重大視せらるゝ彼王位問題についてのみは、諸君中の委員と相談し又自ら熟慮考究致しましたけれども、諸君が屢々主張せらるゝにも係らず、不幸にして私は其必要を覺るに至らぬのであります。勿論私は一人の判斷を議會の判斷に比して軒輊なしと考ふるものではありません、然しながら、個人の一身に關する特種の問題に於ては、自己の行爲について神に訴へねばならぬ人は、自己の良心に照らして事の決定をすることが出來る筈であります、そして人民に自由を與ふるを念とせらるゝ處の諸君が、私に對してのみ此自由を拒まるゝことはなからうと思ひます。私の爲すべき事に關して私の心情と思念と判斷とを穿査するは、單に私の自由であるのみでなく、私の義務であります、此義務を果たさゞるは罪を犯すことであります。

そこで他の凡ての點に於ては諸君の御意見を承認しますが、一身上の問題に於ては、強いて諸君の御希望に應じました處が、せいぜい半信半疑を以て之を爲す位のことであります、凡そかくの如きは確信的行爲でありませぬ、信仰的行爲でありませぬ、信仰に

依りて爲さゝるは罪惡であります。

もっと早くお答へ致すべきでありましたが、遷延致しまして、議會に對し委員會に對して時間と勞力とを費させて、何とも申譯ありません。諸君の新政府案は私に對する王號の外は寔に結構なものですが、政治の局に當ると云ふことは並大抵ならぬ骨折を要するものであります故、私は王號を稱して此政府を引き受けると云ふことは到底出來ないと御返事するより外ありません、(かく申し上げねば私は不正直者となるのであります)、之が此重大問題についての私の返答であります。

これが終つて議員は議長ヰドリントン以下皆退出した、いよ〳〵守護官の意志が明瞭となり、王號問題が一先づ結了したので、世人の心も落附いた、此書の作者も讀者も、これで倦怠を免れることになつたわけである。

バルストロードの記事に據ると、守護官は自身では王號を受くる意であつたが、味方より反對の聲が可成りに起つたので、後の時期を待つことゝして、今は之を受けぬことにしたのだと云ふ、之は一說であるが、事の詳細は不明であり且重要でない、要するに人々が贊否兩側に別れたのである。ラムバートは此問題について不公明な態度を執つたと云ふので、クロムエルは年金を與へて彼を退職せしめた、今日まで重要人物たりしラムバート卿も、今はヰムブレドンで花を栽培する人となつた。

『請願及び建議』は王號問題の外は受け入れられた、即ち政府改造案で、上院を設け、主治者は王號を稱せずとも其他の點に於ては王と等しく、自己の後繼者を自ら定むることになつて居た。此頃ブレ

ーク戰捷の報來つて、公けの感謝祭あり、ブレークには寶玉を贈ることになつた、かくて國の內外に於て事が益々好況に向へる中に、第貳守護官政議會は其第一會議を終へんとして居る。

## (一二) 演說第拾五及び書翰第二百拾八—第二百廿四

議會の開會期も愈々終りさうになつた、閉會後に爲すべき仕事が多い、新たに上院を設けねばならぬ、西班牙に對する佛との同盟を續けねばならぬ、次の書類——一の演說と七の書翰——が其間の消息を示す。

### 演說第十五

議會は若干の議案を可決したが、其中には、イングランドに每月三十四萬磅、スコットランドに六千磅、アイルランドに九千磅と云ふ課稅案もあつて、オリヴーは感謝を以て之等を裁可せんとする、其時の語が幸にも遺つて居たので次に記す。

一六五七年六月九日（火曜日）の朝、議員全體は守護官より召ばれた、因て彼等は議案全部を纏めて白館（ホワイトホオル）に至つた、クロムエルは參議員等を隨へて壇上の席に着座した、議長ヂリントンは簡潔に議事の經過を陳述し、且法案を呈した、之に對してクロムエルは同意の署名をなして後、次の如く曰ふた。

議長閣下、

議會の定めた多くの法案の中にて、今私の頂きました課稅に關する諸案は、共和國維持のための議會の熱誠なる配慮を示すものでありまして、私は之に同意を表します、議會に對して其國家のための盡力を感謝して承認するのは、從來主治者の例でありますが

故に、私も亦茲に議會の深切を心より感謝して承認致します。

議會は尙ほ例の『請願及び建議』を修正する必要があつた、而して後守護官就任式が立派に行はれる筈であつた、それで愈々此議會の第一會議も平和の中に終るのである。

## 書翰第二百十八

之はブレークが四月廿日カネーリー群島のサーンタクルースに勝利を得たのに對する感謝の公文である、此勝利については議會も人民も大に喜んで、議會は五百磅の價ある寶石をブレークに贈ることを定めた、之と共に、「十四隻の軍艦を留め其餘を率ゐて歸國すべし」との命令も彼の處へ往つた、ブレークは八月七日ブリマス港の沖まで歸つたが其儘艦上に死した。

貴下よ、

四月廿日附の貴翰正に拜讀、サーンタクルース灣に於て神貴下をして西班牙王の艦隊を破らしめし由、慥かに承知致候。

我等に對し、此共和國に對する天恩は實に著しく、又驚くべきものにて候、王黨と戰を開始せし以來、我等は恒に主の大愛に浴し居り候へば、我等は宜しく主を畏るゝと共に、其慈愛の中に希望を抱くべきにて候。

主が貴下を導き、貴下を助け、貴下を用ひて此事を爲し給ひしを我等は認め申候、貴下に對する我等と議會との感謝を表するため、茲に小なる寶玉を贈り申候、又士官水兵皆正直と勇氣とを以て働きし由につき、彼等に對する感謝の發表方法を目下考慮中にて候、何卒彼等に我等が感謝の意を宜しく御傳へ被下度候。

神恒に貴下と共にあらんことを祈る、以上。

一六五七年六月十日、白館にて

守護官オリヴー

海上にある

大將ブレーク殿

陸將レーノルヅは六千人の兵を率ゐてネヴーランヅに西班牙兵と戰はんとし、海將モンテーグは海上より之を助けんとする、海に陸に樣々の事件が起りつゝあるが、倫敦に於ては守護官就任式が更めて正式に行はれるのである、彼は王冠を受けはせぬが、極て崇嚴に其守護官就任式がされることになつた。

一六五七年六月二十六日(金曜日)。議會も全國も此擧式で大騷ぎをして居る、『請願及び建議』の形に於て議會の出した政制改造案も最後の決定を經、議會は萬民歡呼の中に閉院する、そこで金曜の午後二時愈々就任式が行はれた、式場の崇嚴善美を極めし有樣は古文書に於て之を知ることが出來る。

此式場に於て、議長は議會を代表して先づ第一に天鵞絨の紫衣を守護官に献げ、ホヰットロック等の助を借りて之をクロムエルに着せた、第二に議長は愛を表徵する贈物として立派な聖書を呈し、次に議長は劒を佩かせ、金の笏を彼の手に帶びさせた、そして議長は得意の華麗なる辯を奮つて、之等表號の意味を說明した、之に對してクロムエルは默して、唯身振を以て答へた。——式はかく崇嚴に終つて、人民は數回歡呼した、實に莊麗なる光景なりしよ！

其當時に於て崇嚴なりし此事は、今に於ても何時に於ても、然らざるを得ぬ、物の表號形式に於てこれ程までに立派な一節は他にあり得まい。——議會は一月二十日まで閉院せられ、其間に上院其他が準備せらるゝことゝなつた。

書翰第二百十九

書翰第二百二十

書翰第二百廿一

〔譯者曰、此三つは何れも五六行の短翰にて重要ならざるもの故譯載を畧す〕。

書翰第二百廿二

ネザーランヅの西班牙軍を共擊せんとの英佛間の協約が去る三月に調印せられたが、其協定の條項は斯うである、佛王は兵二萬、英守護官は兵六千を出すべきこと、此聯合軍はグラヱリンズ、マーダイク、ダンカークの三海岸邑の畧取を計るべきこと、もし此三邑が陷りたる時はグラヱリンズは佛領となり他の二は英領となるべきこと、もしグラヱリンズが第一に陷りたる時は他の二邑が手に入る迄之を一時英にて占むべきこと——之等が其條項であつた。マーダイク、ダンカークの二邑をクロムエルが得んとしたのは、一には此邊より來るらしき王黨の侵擊に供へんがため、一には新教諸國の一大同盟を造るに便せんがためであつた。

オリヴーは此協定を能く守つて、既に陸將レーノルヅと海將モンテーグをネザーランヅに遣つた、若きルイ十四世は宰相マザレンと共に、海岸に來りて英軍を歡迎した迄は宜いが、協約に背いて內地の要所を攻擊せしめんとし、かの海岸三都邑の攻擊の如きは種々の口實の下に之を延引する有樣であつた、オリヴーの不滿足は遂に其極に達し、同じ日に二回まで駐佛大使に訓令を發した。

「駐佛大使サー・井ルヤム・ロックハート」と云ふのは立派な人物、有數の外交官であつた、既に二ヶ年ほど佛蘭西に居る、嘗て軍人たり

し事もあるので、外交でも戰爭でも、手に觸るゝことは何でも男らしく立派に遣つてのけると云ふ人物であつた、先づクロムエルが有せし最上の大使であつたと評せられて居た。

貴下よ、

貴翰拜誦、貴下の勤勉と有能とは疑ひなく候へども佛蘭西の協約不履行は著しと存じ申候。

「内地の守營を英に與へん」とか「次の戰には海岸の都邑を攻擊せん」とか云ふ如きは、まことに小供騙しの語にて候、もし守營を與ふとならば、むしろカレー、ディーエプ、ブーロニーを我國に與へては如何に！　思ふに佛は我等が對岸に根據地を有するに至ることを、大に嫌ひ居るにて候はん乎。

就ては佛相マザレンに次の如く余の意志を御傳へ被下度候、即ち若し佛にて西班牙を制せんと欲するならば、英との協約を履行するに勝るの道なしと余は思惟致候、我等は兵力に於て佛に勝るとは云はざれども、海より佛軍の攻擊を援助して敵をして策の出づる處なからしむべければ、今日こそ攻擊の最好時機にて候、且つ佛の騎兵は以て敵を擊破するに足るべく、英佛兩軍とも後方より援助を得ること至つて容易く有之候。

今日攻擊を怠るは、徒らに西班牙に增兵の猶豫を與へ、且英軍をして何の効果なしに尙ほ一夏を徒費せしむる所以にて候。

若し佛にして此提言を用ひざるならば、我等は今日までに費したる莫大の出兵費用に對して、彼の責任を問はざるを得ず候、又兵を歸國せしむる費用についても、彼の考慮を要求せざるを得ず候。

余は此點に關して佛の明言を要し候、我等に對する彼の正當なる期待は神の助によりて之を速かに充たすべく候、尙ほ我等の意志

は兩國共通の善福のために力むるにある由をも、佛宰相に御傳へ被下度候、以上。

一六五七年八月卅一日、白館に於て

守護官オリヴー

駐佛大使サー・井ルヤム・ロックハート殿

## 書翰第二百廿三

同じ日附、同じ名宛、同じ便である、前の手紙を後から補つたのである。

貴下よ、

最初の攻擊地はグラヱリンズよりもダンカークならんことを我等は望む、而してダンカーク陷落の後他に及ぶを可とす、失敗せんよりは一つにても占領するを宜しと致し候。

もしダンカークを先とするならば、我等よりは更に數千の兵を出動せしむるも宜く候、此度の征戰は西班牙がチャールズ・スチュアトを援助するを妨ぐる道とも相成るべきかと存じ候へば、佛にして眞實なる以上は、我等は出來べきだけを努むべく候、但し彼にして背信にして我等をして大陸に地歩を占めざらしめんとせば、別封にある通りの賠償を彼より要求致さゞるを得ず候。

佛蘭西との之等の交渉に於て貴君が勇氣と敢行とを示さんことを望み候、以上。

一六五七年八月卅一日、白館に於て

守護官オリヴー

駐佛大使サー・井ルヤム・ロックハート殿

此手紙は自然効果を奏し、佛蘭西では「佛の宰相は惡魔よりもク

ロムエルを怖る」と云ふ諷刺が行はれた、實際彼はもつと惡魔を怖れるべきであつたが、クロムエルの方が差向怖ろしかつた。そこで佛兵も急に行動を開始し、マーダイクが先づ第一に海陸總攻擊を受けて陷落した、時は九月の末であつた。そして英の將軍が之を受取つて之に防禦工事を施した。

## 書翰第二百廿四

〔譯者曰、此手紙は一六五七年十月二日クロムエルより、ロンドン艦に坐乘してダンカークの沖に在る海將モンテーグに宛てたものである、之を省く〕。

ドン・ヂョンを將とする西班牙兵はマーダイクの回復を企てゝ、十月の廿日頃ダンカークの方面から攻擊を加へた、此西班牙軍中に王黨のヨーク公が西班牙の資を以て募りたる四個聯隊の兵を以て加はつて居た。しかし此逆襲は無効に終りて、彼等は多大の損害を受けて退却した、モンテーグの砲火は海上より手痛く彼等を見舞つた。

附記す、ダンカークも亦翌年の夏、六千人の勇敢なる襲擊に堪へずして陷落し、英の要塞となつて大に重せられた、然し王政復古の後、王は此地を賣つてしまつた。——之を要するに英のネザーランヅ攻擊は効果を收めたりと云ふべきである。

クロムエルがロックハートに手紙を遣つた八月卅一日に、少佐ッルバーンの葬儀がクェーカー教徒の間にて行はれた、彼は此頃クェーカー派に屬したのであつたが、八月の二十九日に此の世を去つた。

一人の不平家が世を去つて、も一人の不平家も世を去らんとしつつある、即ち狂熱的再洗禮派信者のセクスビーは、叛亂を企てゝ捕へられ、後發狂して一月には牢死してしまつた、あはれなるセクス

ピーよ。

陰謀、騷擾は尙ほ歇まぬ、西班牙を後援とするチャールズ・スチュアトの英國侵入は今年（一六五八年）も試みられるであらう、一月から開かるゝ議會には、屢に拒斥された議員等も新たに加はるし、上院も新たに出來る、また如何な面倒が起らぬとも限らぬ。しかし之等に對してクロムエルは充分準備が出來て居ることであらう。

一月から愈々議會が始まる、之は第貳守護官政議會の第二會議である、そして又其最後であつた。

## （一三）演說第拾六

此議會の第一會議は去る六月に閉ぢられたが、當時形勢は甚だ好望であつた、愈々萬事が確定せられ、法律上に政府も承認せられ、都督制度等正規ならざる權威は以後不要と云ふことになつた、そして議會閉會中にネザーランヅ攻擊等の公事は凡て旨く行つた。されば此第二會議も第一の如く成功するに相違ないやうだが、悲しいかな、四百人と云ふ多人數の議論や氣分を基礎とするやうな成功は、極て不確實なものなのである、まことに此第二會議の開かるゝ頃は、形勢は少しく變つて居た。

第一に、上院が出來るわけだが之が如何な態度を執るかゞ問題。

第二にハスルリッヂ、スコット等の危險分子が議員の中に加はつた（第一會議には拒否されたが、彼等は、今度は新政府を承認する由を表明したので、議席に着くことが出來た）。守護官は例の通り、あまり心配はせずして最善の努力を爲す覺悟で居る、しかし此議會は全然失敗に終つてしまつた、恐らくは空前絕後の不成功的議會であらうか。

上院の新設はたしかに一の冒險であつた、守護官と議會（下院）との間に立つものが必要と思はれたので、當時の事情に於て此上院設置は先づ最善の措置であつたと見ねばなるまい。新たに植ゑし樹の如く尙ほ甚だ小弱であるが、もし其中に眞生命があり、生るべき充分の必要があるならば、立派に成長すること疑ひない、天もしクロムエルをして從來の如く成功せしむるならば、此新貴族院も亦必ずや彼と共に成功しつゝ進んだであらう。

上院議員として招集せられしもの六十三人、其中四十人以上議席に着いたが、其多くは下院議員の中より選び出された、ためにクロムエルは下院に四十人の味方を失つたわけで、之が大に事の障害となつた。

とにもかくにも、一月二十日は愈々來つた、そして議會の全員は政府承認の宣誓をなした。之が先づ第一段であつて、次に下院は成立を告げたが、間もなく守護官が上院議事堂にて下院議員の來集を待つとの報知があつたので、一同打ち連れて其處に往つた、クロムエルは恙（つゝが）ありて、次の如き簡單なる挨拶に止め、委しき事は玉璽捧持官ナサニール・フィーネスをして演述せしめた。

諸卿及び紳士諸君、

此議會よりの『建議及び請願』に據る資格に於て私は茲に諸君と會します、長き流血と出費の後に於て、今や我々は神が三國民に賜はる恩惠を探り求むる場合に立ち至りました、諸君の之れ迄の御骨折は、私の感謝し又肝銘して忘るゝ能はざる處であります。御承知のごとく我々は種々の困難を經て、今や或結果に到達しました、其結果は未だ我等の目的點には達せぬけれども、併し豫期

以上に出でました、即ち我等の目的は英、蘇、愛三國民の自由――人間としての政治の自由、基督信者としての心靈の自由――を確保するにあります、之が我等の主義であります、我等の爭鬪の根據であります。

而して十年間の戰鬪の結果として、神は其恩愛の聖手を以て『建議及び請願』にある通りに事を制定し給ひました、我等は宜しく彼を讃美すべきであります、國民は擧つて彼を讃美すべきであります。

私は此議會の初會議に際して、詩篇第八十五篇について少しく申しましたが（演說第六）、此詩はまことに能く我等の云はんと欲する處を言ふて居ります。先づ「エホバよ、汝は汝の國に惠みを注ぎ給へり、汝の民の俘囚（とらはれ）をかへし給ひき、汝己が民の不義を宥し、そのもろ〳〵の罪をおほひ給ひき、汝すべての怒を棄て、その烈しき憤りを遠ざけ給へり」とあります、そして之等の恩惠、之等の赦免――凡て此詩にある通り我英民に起りました、實に目下我等が平和を樂み、其他種々の便安を享受して居るのは、一に神の慈愛に因ることで御座います。

神の愛の最大なる證據は彼が我等に平和を與へ給ひしことであります、平和の幸福は政治上及び心靈上の自由の享受であります。詩篇第八十五篇は現在の恩惠を感謝し、未來の恩惠を祈求し、遂にかく申して居ます、「實にその救拯（すくひ）は神を畏るゝ者に近し、かくて榮光は我等の國に止まらん」（九節）と。第一節に「汝は汝の國に惠みをそゝぎ給へり」とありますが、此英國は彼の國であらうと思ひます、我等は神に救ひ出された民であります、神は羅馬法王の手より我等を救ひ出し給ひました、種々の困難より我等を救出して、今の樂地に迄導き來り給ひました。

そして福音と平和と安息と――凡そ我等の願ふ處を我等に與へ給ひし神は、實に「われ等の神」であります、我等は困難に圍まれた時に於てさへも、神の民は敵を恐れずして、神を拜するの自由を得るに至らんと豫期し得べきでありました、是れ「我等を敵の手より救ひ、我等の生涯を聖と義に於て懼れなく主に事へしめんと也」（路加傳一章七十四、七十五節）との、キリストに關する聖約の承認であります。

詩篇第八十五篇は尙ほ進んで、「かくて榮光は我等の國に止まらん」（九節）と申しますが、我等の榮光は福音の自由信仰であります、これ我等の榮えであります。此詩は尙ほ曰ひます「慈愛と眞實とは共に合ひ、義と平和と互に接吻せり」と、そして「眞實は地より生え、義は天より來らん」とあります、そして「義はエホバの前にゆき、エホバの歩み給ふ跡を我等に踏ましめん」とは此詩の終結の語であります。我等の主より惠まれたる義と慈悲と愛と恩惠とは我等を導きて、我等に正しき道を敎へます、エホバの歩み給ふ慈愛と義と善の道を我等に踏ませます。

又平和も今日たしかに在ると思ひます、しかし不平家も澤山あります、神の聖業を喜ばぬ徒が澤山あります。彼等の目的とする處は、ネブカデネザル王が夢に見た像の脚の如く、鐵と泥土の混合であります〔但以理書第二章〕、鐵と泥土とは到底うまく混合しません、彼等の終末は遠くはないでせう。

凡て騷戾不穩の徒は神の聖業を了解せぬのであります、神は我等をして神を畏れしめ、又其御恩惠に浴するの自由を得しめんがために、惡の力を粉碎し給ひたるに、彼等は之を認めぬのであります、ダビデの云ふたのは彼等の如き人々についてゞあります、「かれ等はエホバの諸々の事とその聖手の作業とを顧ず、この故にエ

ホバ彼等を毀ちて建て給ふことなからん」（詩篇第二十八篇五節）と。

されば私は申します、諸君にして諸君の立つ基礎如何を知らんと欲せんか、諸君の基礎は神より來れるものであるのです、彼は諸君をして今日あらしめました、諸君をして政治上及び心靈上の自由を享樂せしめ給ひました。

私は少しく健康を損して居りますので、もはや申し上げませんが、唯一言だけ附け加へます。此議會開始以來、諸君の御精勵に因て、事が茲まで運んだのであります、私は此議會のためとあらば、微力を奮つて熱心に且快活に働き、命を棄つるも敢て厭はぬ覺悟であります。

神は諸君の過去の事業に於て諸君に實行の力を賜はりました、もし彼にして尙ほ諸君を惠みて此會議を祝し給ふならば、諸君は皆「主に祝さるゝ者」と稱へられ、子孫は我等を祝福し、諸君は「破隙を補ふ者、市街を繕ひて住むべき所となす者」（以賽亞書第五十九章十二節）となるでありませう。そして此世に人間の爲す仕事として、之以上の高貴なるものがあらうとは信じられません。

私は病氣で此上申し上げられませんが、私の傍に居る紳士が尙委しく之から申し述ぶる筈であります。

之が終ると、ナサニール・フィーネスが長い演說をしたが、立派なものであつた、彼は創世記の創造說に比して、今の英國に上下兩院が出來たのは、丁度天と地が出來たゝけのことで、尙ほ此上に爲すべき事が多いと述べた。

西班牙を後援とするチャールズ・スチュアトの英國侵入計畫は、着

着として歩を進めつゝある、チャールズは自ら四箇聯隊の兵を擁し、和蘭は彼に船を貸さんとし、西班牙の將ドン・ヂョンは、もし英國内の王黨が蹶起するならば、六千乃至一萬の西班牙兵を以て援けんと約した。彼等は海の波のやうに始終動いて泥を打ちあげようとするのだ、狂熱的再洗禮派も動き始めた、風雲うたゝ悽愴とでも云はふか。

海外の狀況も新教徒より見れば芳ばしくない、瑞典と丁抹と共に新教國でありながら互に戰爭をして居る始末、和蘭は英に不信を表し、西班牙、墺太利、法王、法王黨は旨く一致して居る。――此議會たるや、宜しく全院一致協力すべきである。

オリヴー等實際的清教徒が若し此議會に多大の望みを屬して居たとするならば、其望みは間もなく失せたのである。議員の中に非實際的の清教徒が混つて居て、彼等は混沌の間に整然と立つ天と地とを認めず、西班牙の侵入が再び英に混沌を持ち來すを思はず、何でもかんでも其民政思想を把持せんとして居る、そして一人の主權者を戴くと云ふことには理が非でも同意を表し得なかつた。ハ・スルリッヂ、トーマス・スコット、ルーク・ロビンソン等が其重なるものであつた。

## （一四）演說第拾七

前にも云ふた通り上下兩院、少くとも下院は、甚だしくクロムエルの豫期に反した。上院より下院に或相談があつて、下院が之に答へねばならぬと云ふ場合になつて、下院にては上院を何と呼ばうかと云ふ問題について、熱心に毎日々々討論をすると云ふ有樣であつた、トーマス・スコットなどは之を貴族院（House of *Lords*）と呼ぶべから

すと稱して大熱辯を揮つた。實に迂愚なる討論に耽つたものだ。

一月廿五日、クロムエルより招かれて上下兩院議員全部は白館に會し、クロムエルは次の演説をした、彼は過去を顧み將來を察し、海外を望み國内を看、剛壯雄健なる演説をなした。

兩院の諸卿及び紳士諸君、

我等の關つて居る事は甚だ重大でありますが故に、私は國情について私の思念を開陳致し、且目下の危險に對する救濟法をも申し出でようと思ひます。

此三國民の福祉――否存在さへも今や危ふからんとして居ります、神此會合を惠み給はゞ平穩は尚ほ續きますが、もし然うでないとすると〔此語完結せず〕……そこで、如何にせば國の安全を計るべき各自の職責を充分に盡すことが出來るか――之について卑見を開陳致し度くあります。之を聽いて諸君が如何に感せらるゝかは、之を全能者に御任せ申しませう。

私の地位としては、三國の選良たる諸君の御意見を充分に拜聽し、そして國民の善と害禍の防止を計るを以て自己の職分と心得ます。それで神樣が、今日は吾々の極て眞面目に相談すべき時であると云ふことを、充分に吾々に悟らせて下さらないならば、我々は事に着手するわけに參らぬのであります。

諸君の危險は〔クロムエルが諸君と云ふ時に國民全體を指すこと多し〕海外の事か又は海内の事についてゞあります、諸君は我國未曾有の困難を經過して、其終末に至つたわけであります。私は第一に國家の存在を危くするもの、第二に其幸福を案ずるものと、順序を立てゝ申さうと思ひましたが、よく考へてみると、凡てが

國家の存在と云ふことに歸着するのであります、神が目下の害禍に對し得んやう諸君を强めぬならば、諸君は一國たらず、一國たり得ぬのであります。

先づ海外の模樣は如何でありませう？　新敎の信仰はたしかに「幸福」に關する問題であります、而して今や基督敎世界が悉く天主敎化せらるべきか、或は世界の新敎信者が能く愛を以て團結し得べきか――これが何よりも重大なる問題であると思ひます。

海外の新敎は今や全く蹂躙せられて居るではありませぬか、然うでないかどうか能く私と共に判斷して下さい、そして我等が我等の存在如何についてこれに關係する處如何に深きかを考へて下さい。

羅馬法王と其與黨とは公然と神の民を足下に蹂躙(ふみにじ)りました、而して其理由は唯彼等が新敎信者(プロテスタント)であると云ふのであります、外に何等の根據があるのでもなく、唯新敎信者であると云ふ理由の下に新敎信者を迫害致したのであります、かのアルプス山中の新敎徒の追放せられんとせし如き、其好例であります。併し事はアルプス山中のみに限りません、墺太利、西班牙の如き舊敎國は如何でありますか、新敎そのものを撲滅せんと、彼等は武器を裝ふて居るのであります。

波蘭土(ポーランド)の新敎徒は國外に逐はれて、飢餓に迫つて死せんとしつゝありとの情報は、度々我等に達しました、つい二三日前にもありました、歐洲の南部、伊太利、瑞西の如きは唯西班牙の好餌たるのみであります。そして此舊敎の惡辣事業の總大將は、云ふまでもなく羅馬法王であります、かゝる殘虐なる事を敢行するには極て適當なる法王であつて、彼は惡を充分に滿たして刑罰を受くる資格を我と自ら造るのであります、現法王（アレグザンダー七世）

ほど巧みに歐洲諸國王を使嗾して此一事に當らしめし者は、他にありません。今や實に凡ての舊教國が一致して、邪魔物を悉く除かうと云ふ一大危機であるのです。

之は遠い外國の事で我等には關係ないと云ふ人もありませう、しかし決して然うではないのです、これは諸君の凡ての宗教に關係して居ます、英國の凡ての福祉に關係して居ます。

そして、此大なる舊教運動に反抗する勢力は何處に在るかと云ふに、諸君どうぞ能く考へて下さい、微弱なる一人の王であります（瑞典王チャールズ十世のことで、目下、丁抹王から攻擊されて居る、和蘭も亦之を討たんとして居る）、洵に微弱なる一君主――けれども俠勇にして善良、よく波蘭（ポーランド）土に於て新教のために戰ひました。しかし今は勢力衰へて、最も悲しいことには。新教に屬する者が彼の破滅を希ふと云ふ有樣であります（和蘭人と丁抹人）。

諸君どうぞ少しく考へて下さい、之等の事の結果を少しく考へて下さい、之は唯の空騒（からさわ）ぎでせうか、之は一の明確な聲ではないでせうか、之は單に諸君の福祉を害せんとの企畫でせうか、諸君の存在を害せんとの企畫ではありますまいか。實に之等の術計は新教そのものゝ滅絶を目的とするであります、然るに新教徒の中に、愚かなる行動に出づるものが澤山あると云ふ有樣であります。諸君よ、此陰謀は實に諸君（英の新教徒一般の意味、――クロムエルが議員を指して諸君と云ふ場合には、議員の代表せる人民一般を指すことが多い）、に對してのものであります、諸君を目的物として居るのです、思ふに諸君の信仰告白が純直にして、利益よりも信仰を選び、信仰を以て利益以上の利益となすがために、却て敵の目指す處となるのでありませう。

以上私は言ひ度いだけのことを悉皆言ひました、之に危險がないならば、私は寔に幸です、果して危險がないか如何か諸君宜しく判斷して下さい。諸君の御同意があれば、此問題について充分に御相談致し度いのです、此問題について何等の注意をも致さゝるに於ては、現時は墮眠、偸安、無爲の時代であると云はねばなりますまい。

佛蘭西が今日此舊敎陰謀に加はないから宜いやうなものゝ、もし佛にして敵に加はつたならば、實に我等英國人は世界の敵視を受くることゝなります、全世界が神の敵になり、我等の宗敎の敵となります。諸君海外を御覽なさい！　或國は諸君に敵意を示し、或國は諸君に惡意を表して居るではありませんか、もう充分お解りになつたでせう。諸君どうぞ味方よりも寧ろ敵を信じて下さい、と云ふのは、敵が諸君の破滅を願つて居ることを充分に信じて、味方の信頼するに足らぬことを悟ることです。

我國の敵と云へばエリザベス女王以來同一であつて、今更申さなくも知れて居ます、我國を滅ぼさんことを目的として全力を注ぎつゝ來つた敵であります。彼等は公然たる企圖（西班牙艦隊の英國攻擊の如き）に失敗して、種々の陰策を以て我國民の間を亂し、以て間接に我國の滅亡を謀りました、そして今日彼等は同樣の目的を、一生懸命に遂行して居るのだと諸君はお考へになりませんか。和蘭人は我エリザベス女王の保護を乞ひて之を得、以て國の安全を確保しました、彼等にして此恩義を忘れるやうなことがあつては、其榮えざることは察するに難くありません。處が諸君――諸君どうぞ能く承知して下さい――彼等は實に奇態なことを致さうとします（神に謝す、私共は未だこんな事をしたことはありません）、即ち其武器を敵に賣り船を敵に貸さうとします。彼等が此意

向を發表したことは既に事實であつて、今更どうのかうのと論ずべきことではありままん、既に明々白々な事實であるのです、彼等は故チャールズ王の子なる一青年に對して、英國侵擊のために四千の歩兵と一千の騎兵とを運ぶべき帆船を貸し與へました。諸君は今や自己の危險を悟りて正當なる防禦のために一致すべきであります。

私は國防のために費用を要する時、之を諸君に求むるのに何等の術策をも用ひず、公明に卒直に之を致しました、以後も斯樣にする積りです。私が之について諸君に對して甚だ有體に申し上ぐることゝ、又之について諸君と國民とに對して愛情と忠實とを以て致すことは、諸君にお解りになるだらうと思ひます。

外政は上述の如くであるとして、今度は內政の狀況如何を考へて頂き度いものです、そして內外の實狀を知つて諸君が適當なる思考をせられたならば、願くは神、諸君をして國家のために適切なる處置に出でしめんことを祈ります。私は懇願的に諸君に臨み度くありません、唯今日まで我神、我指導者たりし彼を仰ぐのみであります。

國家の事情と云ふても、何處から話し始めて宜いやらわかりませぬ、我等は無限絶妙なる攝理の下に尙ほ平和の中に在りますが、我等の間には苦難多く、心靈の事については分離を極めて居ります。去かし我等は戰ひて而して成果を收め、世界驚歎の的となつて居ます、そして今日平和の中に居ると云ふのは、未曾有の最大奇跡と云ふべきであります。此平和を害せんと欲する者あらば、願くは神之を除き給へ！

然るに國內の狀況は如何でありますか、各宗各派相別れ相鬩ぎて、

黨爭に日も亦足らざるの有樣を呈して居るではありませんか、神の御援けあるに因り幸ひに今日斯うやつて居られますが、然うでないとするならば、國は全くの無政府的狀態を呈することでありませう、そして再び內亂が始まることでありませう。此點に於て實に憐れなるは我國であります、各派各黨相別れて、各々自派のみ勢力を得て他を壓せんと盲動して居る有樣——げに傷ましいではありませんか。

望ましきは國に秩序あらんことです、惡秩序も無秩序には勝さります、惡政府も無政府には勝さります。然るに我國には分派の徒らに多きのみならず、益々分離の多からんことを願ふと云ふ傾向があります、たとへば傷を作るに止めずして、其傷を抉つて更に大きくしようと云ふのです、これ信仰に於ける人の自由を蹂躙せんとする者共の精神であります。而して各派は互に相爭ひ、武力に訴へて目的を貫徹せんとし、人々を誘ひて自分等の麾下に加はらしめんとします、そして自派のみがキリストの旌旗の下に立つと考へて居る始末であります。

諸君、之が現在の我等の實狀であります、まことにこれが諸君の現狀であります。そして之等の內憂外患に對する防禦物は何でありませうか、云ふまでもなく、上下兩院及び守護官たる私であります、此政治制度があつて、兎も角も今や此國には平和と秩序が保たれて居るのであります。そこで諸君の軍隊の有樣は如何であるかと云ふに、憐れな無支給の軍隊で、兵士は此市、此時、此時候に於て素足で歩いて居ると云ふわけです、(一月二十五日)、さかし彼等は溫良にして、命を投げ出して諸君のために働かんと欲し、苦難に堪へて國の平和を保たんことを念として居ます！　英國人たるものは凡てかくあるべきであります、かくあらぬは頑執なる

情(ところ)の人であります。

此政治制度と其伴ふ軍隊――これが目下の防禦力であるのです、王黨と其他二三の非理的黨派は、諸君が平和を贏(か)ち得し以來、絶えず此防禦力を破碎しようと力めました。諸君、私は――少くとも私だけは――我等に「自由」を持ち來すものは、新たなる內亂にはあらずして、此會合に於ける諸君の堅固と一致であると思ひます。それ故私の言ひ得ることは、此政治制度を支へて行くことが、諸君として賢明正法なる行動であると云ふであります、諸君はこれに同意し、之を好まれることゝ、私は思はざるを得ません、私自身は之あるがために重任に當ることを厭はなかつたわけであります故、諸君が然うでないとすると、私は大なる誤想をしたことになります。

かやうに申上げても、諸君が我國の危險をお覺りにならぬならば、もし此政治制度を破壞してしまつた時には、如何なる結果が生れるであらうかと云ふことを少しく考へて下さい、スコットランドやアイルランドにある軍隊には、既に六ヶ月以上も無支給になつて居ること故、暴動の起るのは當然であります、且スコットランドは今日未だ充分の鎭靜に達して居らぬのであります。此政治制度が一度崩れた後の狀態は實に恐しいだらうと思はれます。王黨其他の陰謀は國の內外に繁く、國內は黨爭分離の狀を呈して居る今日……英國に於て此議會を除いての外、何處に今日一致共同がありますか。此場合に際して誰か空虛な討論に耽つて居ることが出來ませうか、上述の如き危急の大問題を閑却することが出來ませうか、危險は內より外より身に迫つて居るに、小事に關はり小事を爭ふのみで、全心全靈を以て此大事に當らぬと云ふが如きは、げに愚かの骨頂と云はねばなりません。

さて斯く御報告申して、私は神に對し諸君に對して義務を果たしたのであります、私は既に、外より内より我等に臨まんとする事について語りましたので、此上は、神が諸君をして悟る處あらしめ、一致協力して事に當るやう諸君を導き給はんことを私は祈ります。

我等は十年の戰亂と六年の平和を持ちました、戰爭の害惡は充分我等の實見し實感した處でありますが、神は今我等に平和の喜びを賜はりました。此平和――これは神の大なる恩惠ではありませんか、我等は空しく時を浪費することが出來ませうか、平和を破らんとの蠱惑に耳を傾けることが出來ませうか、然るに神の最大恩惠たる平和と福音とを蔑視すると云ふが如きは、私には正氣の沙汰とは思はれません。我等に平和と福音とがあります、我等は一致協力して此國民の正しき權利を支持し、平和を害ひ國を滅ぼすが如きことを避けようではありませんか、若し更に戰亂が起るやうなことがあつては、既に今迄の戰に於て疲弊したる國家は、忽ち亡ぶるに相違ありません。私は諸君に願ひます、神の名に於て要求します、之等の事を心に留めて充分に考慮して下さいと！

私は神樣が諸君の心を拓いて此眞理を悟らせ、諸君が凡ての分爭を忌み、使徒パウロがコリントの敎會「ローマの敎會の誤りである」に語りしやうに、「爭ひ分たせ又躓かする者を視とめて之を避」（羅馬書十六章十七節）くるに至らんことを願つてやまぬのであります。

最後に一言申し上げます、私は此前詩篇第八十五篇について所感を述べましたが、其際云ひ落した一節があります、即ち、

わが神ヱホバの語り給ふ事を聞かん、ヱホバは其民其聖徒に平

和を語り給へばなり、されば彼等は愚かなる行爲に再び歸ることなかるべし（第九節）

と云ふ一節であります、分離、黨爭、而して終に內亂――此「愚かなる行爲」は滅亡を生むものではありますまいか。神もし諸君の心を結び、諸君に融和と愛の惠みを與へ、諸君の心に起らんとする謬想を取り除き給ふならば……「此語完了せずして次に移る」……之を愛擁するものゝ中に義の果を結ぶべき平和の維持を、諸君が選ばぬとすると、此憫れな國について「萬事休せり」と云ふべき時が來るに違ひないのです。

しかし神樣は斯樣にはなさるまいと私は信じます。私は生きて居る限り、出來る限り、神の與へ給ひし處にして人間の驕慢や嫉妬にて破壞する能はざる此有望なる一致（新政制）にありて、諸君と成敗を共にせんと覺悟して居ります。私は「法規に循じて」統治することを宣誓しました（去年の一月廿六日エストミンスター館（ホオル）に於て）、私は此誓に應ずるやう努めます。私は此地位を自ら求めたのではありませぬ、私は神の前に、天使の前に、萬人の前に、此事を斷言して憚りません、諸君が私を此地位に上せ、此職に就かせたのであります。それで私は國利に忠實であり政府に忠實であることを誓ひました、此共和國のために盡すと云ふのは、此政府の法律に循じて爲すべきことであります、凡ての正しき福祉の保たれ、信仰に立つ政府の支へられ、萬人が政治上、宗教上の正當なる權利を保護せられんことであります、かゝる意味で私は宣誓をなしたのであります。――最早悉皆（のこらず）申上げました故、此上は神が諸君を祝福せんことを祈るのみであります。

## （一五）演說第拾八

今や難破せんとする船の剛勇なる船長の語に比すべき此守護官の最後の警告も、何等剴切なる結果を生じなかつた、ハスルリッヂ、スコット等を先棒として空疎なる討論が毎日々々愚圖々々に行はれて居て、ます〳〵空疎に、ます〳〵問題が面倒になるばかり、その記錄を今日より讀んでみて頭が痛くなる。然るに一方には既に來るべき騷亂が孕んで居る、オーモンド公が何か忙しさうに動いて居ると、第五王國論者などが何事をかを計り、軍隊の中にさへも騷擾がある始末――議會がこんな風では、一度西班牙に據るチャールズの侵入あらば、叛亂は突として湧起すること必定である。

さかし一人の强剛なる人（クロムエル）ありて此恐るべき結果を堰き止めることが出來る、此人が居なくなれば此結果は多分避け難いであらう、けれども幸にして此人はまだ生きて居る。議會のつまらぬ討論は尙十日間も續いた、中には有用な議案を提出するものもあるが、之等は一向顧みられないで、唯憲法的空論のみが歡迎さるる有樣であつた、そして噪狂放肆の徒が其首導者と云ふわけである。此第二會議の歷史は――イヤ凡て守護官政議會の歷史は――立憲的の人より見ては一向芳ばしくもない。

さて空虛なる討議續いて十日に及び、ます〳〵喧々囂々を極むるに當り、時恰も一六五八年二月二十四日午前十一時、トーマス・スコットが何事をかを演述せんとせし時、クロムエルより「上院に於て諸君と會したし」との通告が來た、それ故議事を中止して一同上院に赴いた。

かれ等が上院議事堂に着するや、クロムエルは並々ならぬ眞摯と

悲痛と決斷と嚴格とを示せる容貌を以て、次の如く演說した。

閣下及び紳士諸君、

私は神が此議會の會合を以て祝福の因となし給ふことを豫期して、自ら慰めて居た次第でありました、祝福とは慈悲、眞理、正義、平和の意味であつて、今日までに既に或程度まで得られたのでありますが、之が此會議に由りて益々完成に近づくことゝ豫期したのでありました。

私をして此職に立たしめしものは、諸君の私に與へたる『請願及び建議』であります、諸君は上下兩院を設け、又私には更めて守護官の位置を與へたのであります、私が此職を求めたのだと云ひ得る人は一人もありますまい、苟も英國の土を踏む人にして、男にもあれ女にもあれ、かく云ひ得る人はありますまい。併し國民は內亂の苦を免かれて平和の六七年を味つたこと故、之を喜ばぬことはなからうと私は思ひました、さりながら、斯樣な政府を引き受けることを諸君から望まれて、堪へ難き重荷を負ふたわけでありますが、立法の權を占むる議員諸君よりの依囑である故、諸君が旨くして下さることを私は豫期したわけであります。私はかやうな政府を引き受けるよりは、むしろ田舍に歸つて森の傍に羊を飼つた方が遙かに幸福であると、私は神の前に申します、〔原註、然り閣下よ、その方が遙かに靜穩に、健全に、自由であつたであらう。しかしもう其幸福は去つた、森の傍で平和に草を食ふ羊を看守し、夕樹々の間を漫步して靜かなる大思想を抱き或は神の輝きに觸ると云ふやうな幸福は今は得られぬ、辛勞煩苦ます〳〵增して死に至つて初て止むの有樣である。イヤ〳〵閣下は森の傍に居つたとて幸福ではないであらう、天を懷ひ地を思ふて此國の現

狀に想倒する時、どうして安閑として居られよう、永久の事業のなすべきあつて、誰か地上の區々たる煩勞を呟かんや、眞の事業を爲さば其事業永久に續かん、呟く勿れ閣下よ。――守護官は呟いて居るのではない、假定的に田園生活を口にじたのみである〕、けれども諸君の『請願及び建議』に依りて之を引き受けたのであるゆゑ、諸君が之を旨くして下さることゝ豫期したのでありました。

曩に私は、私と議會との間に立つ人〔複數〕がなくては、私は政府を引き受けぬと申しました、そこで私がも一つの議會（上院）を起すことを許されました。此新議會の議員として私の依囑した人々は、諸君と手を携へて事に當り得る人々として、其貴ぶ處は位階にあらず、侯伯にあらず、黨派にあらずして、基督信者と英國の福祉とであります、諸君にして英國と基督教とを愛せらるゝ以上は、彼等は諸君に加へられたる新勢力であります。

又私は、治者と被治者との間に正當なる一致がなく、彼等が議會の『請願及び建議』に於て私に忠告したことをして効果あらしめんとの誓をなさぬならば、此政府を引き受けなかつたのであります。それで私は誓をなし彼等も亦之に應ずる誓を致しました、神知り給ふ、私は『新政制法』にある通りの條件の上に誓をしたのであります、即ち上下兩院に輔けられて守護官の任に當ると云ふ意味に於てゞあります。而して此決定に至るまでは凡てが不確定の狀態に於てあつたのですから、もし此事が定まらなかつたならば、萬事が混亂に陷つたことでありませう、又世襲の華族や世襲の王は生れないで、政權は兩院と守護官とに存することに定まつたのです。――私は諸君の誓も此意味に於てゞあつたとは申しますまい、かく他人の良心を侵すことは私の主義に反します、神が諸君と私

との間を判定し給ふでありませう。併しもし諸君に政體確定の意向があつたのだとするならば、諸君は「一守護官二議會」の決定の上に立ちて之を動かすべからざるものとし、其他の比較的小なる問題について諸君の判斷や意見を發表なさる筈なのでせう。神は私の證人であります、又人は皆知つて居ることである故私は申します、諸君の同意に由りて定まりたる此新政制に反抗する運動が軍隊の中に起つて居ると。私は諸君に對して此事を告げるのです、他の人に云ふのではありません。諸君が私を此地位に上せ、此職能を私に與へたのであります、其諸君が自らの間に分離を惹き起し、又國民の間に分離を惹き起しました、諸君が此第二會議を開いてより、僅か十五六日を經たのみで、國民は議會閉會中に於てよりも騷亂の態を呈しました。これ新たなる共和國を造らんとの計畫ありしためであります、二三の人が政權を占めんとの陰謀をなしたゝめであります、そして彼等は軍隊を誘ふて此陰謀を行はんとします、私は軍隊關係者の面前に於て敢て申します、卿等いかに詭辯を弄すとも、これ神の聖旨に適はず又眞理に適はずと。私は之を防ぐために全力を盡すを以て、私の天より與へられたる命令と存じます。

十日前私が諸君に對して、英國侵入軍の計畫ある由を申しましたが、(神は私の證人であります)、蘇人の王が海岸に軍を整へて、英國に向つて船出せんとして居ると云ふ報知が、到着したばかりであります、之は實見したものゝ報知であります。又此倫敦の市民をして擾亂を起さしめんと謀つて居る人達も、私よりあまり遠からぬ處に居ります、私は神助に由りて之を鎭めんと願つて居ります。

諸君はたゞに軍隊を紊したのみならず、諸君の中の或人々は、叛

亂起らば之に加はらんとするの態度をさへ示しました、既に敵が我國に攻め入らんとしつゝある今日、かくては我國は忽ち血雨混亂の修羅場と化すること必定であります。これ等凡ての原因たる、一に諸君が諸君自ら定めたる新政制を認容せずして、事の決定を計らざりしがためであります。それで、之が諸君會合の結果であるならば――これが諸君の行動であるならば――今こそ諸君の會合を停むべき時であると思ひます、それ故私は此議會を解散致します！　願くは神、諸君と余との間を審判き給へ！

ハスルリッヂ、スコット等一味の顏附は如何であつたらう！　議長は退き議員全部は退き、かくて「饒舌る器械」は失せた。「願くは神、諸君と余との間を審判き給へ！」と、彼等は「アーメン」と應じ、怒つて其然らんことを望み、而して永久の沈默に沈んだ。

實に危機であつた、怪蛇は到る處に其頭を擡げて居る。ミルトンの友人なるサミュエル・ハートリブは翌週或人に書き送つて曰ふた、「もし此議會がもう二三日も續いたならば、チャールズ・スチュアトの故に、全國に血の雨が降つたことであらう、その解散は必要已むを得ざることであつた」と。

守護官は此月曜日の中に、陰謀騷亂の巨魁等を倫敦塔に監禁し始めた、「饒舌る器械」がなくなつたので、彼は再び怪物に向ひて之を退治せんと全力を注いだ。彼は土曜日に將校士官即ち「働く器械」を呼んで、二時間程演說をなし、「怪物」の性質を說明し、「之をして勢力を得しむべきか」と問ふた、彼等は其本心より「否然るべからず、我等は閣下と成敗生死を共にせん」と答へた。これはクロムエルが、「饒舌る器械」の緩怠のために活動を開始した怪物との最後の決鬪であつて、此度も亦立派に之を退治してしまつた。

三月の初、或日クロムエルはブローデル卿に曰ふた、「貴君の舊友たるオーモンド公が、倫敦ドルーリー街の法王黨に屬する或醫者の家に居る故、退京をすゝめて下さい」と、ブローデル卿は往つて公を發見し、公は直樣退京した。月の十二日に、守護官は市長及び市會議員を白館（ホワイトホール）に招いて、オーモンド侯の去りしことを告げ、西班牙の侵入、王黨の叛擧、狂熱的再洗禮派の叛亂等の漸く熟せるあれば、倫敦市は其民兵を整へる必要ある由を語つた、茲に於て市長等は熟心に之に應ずる行動をなした。之を要するに「饒舌る器械」がなくなつて、オリヴー自身が「働く器械」の頭首（かしら）となつたので、叛亂も容易に起り得ないのである、重なる王黨員は再び身を隱してしまひ、捕囚の身となつたものも少くなかつた、そして高等法院が彼等の審問を開始した。

少しわけの解つた王黨員は一先づ叛擧を斷念したが、わけの解らぬ連中は、どうでもかうでも自分等だけで之をものにしようと欲つた、そして五月の十五日に倫敦市にて事を擧げんと豫定したのであつたが、例の如く事を發するに先だちて彼等は皆捕へられてしまつた。守護官とサーローとはもう前から注意して居たのであつた、彼等の陰謀は煙と消えて、唯高等法院にて審問さるゝ人間が殖えたばかりであつた。

一六五八年五月二十五日（火曜日）。高等法院は勳士爵（ナイト）のサー・ヘンリー・スリングズビー、神學博士のヂョン・ヒューイット、其他三人の審問をなすために、午前九時よりエストミンスター館（ホール）にて公判を開いた、殘らず判決せらるゝまで毎日々々開かれた。サー・ヘンリーとヒューイットは叛擧の證跡充分にして死刑の宣告を受け、他の三人は僥倖にして（又は守護官の慈悲に由るか）無罪の宣告を受けた。

勳士爵と神學博士とは六月八日（月曜日）、民衆の樣々なる風評と

情緒の中に倫敦塔丘（ダウンヒル）にて處刑せられた、又倫敦市中にて陰謀を企てしものゝ中、六人が死刑の宣告を受けたが、其中三人は處刑せられ三人は宥された。かくて高等法院は閉鎖し、右の如く少量の碧血が流されたのみで、此大叛亂計畫も終熄して火の消えたやうになつてしまつた。

クロムエルがもつと長く生きたと假定して（彼は此九月に死んだが）、斯る守護官に對して二度と王黨の叛擧が起つたであらうか――とてもそんな事はあり得まい、王黨も度々の失敗を重ねて、すでに甚だしく沈衰してしまつた。十二ヶ月程のち、既にクロムエルは此世に居らなかつたにも係らず、「基督教國王」チャールズは西班牙よりも佛蘭西よりも最大の冷遇を受くると云ふ有樣であつた、外國でも之を援けず、英本國に於ても王黨は見る影もなき衰頽を呈した、清教主義（ピューリタニズム）が自ら亡ぶるまでは、王黨主義（ロイヤリズム）は再起し得なかつた。さかし清教主義（ピューリタニズム）は其王〔クロムエル〕が世を去るや否や、王なくして無政府狀態となり、忽ち衰頽して、六ヶ月にして土崩倒壞し去つた、清教主義に據つて再び英國の政治を施すことは、到底出來ぬと云ふことがわかつた、そして萬事が破碎して如何なる政治も可能ならずと見えし時、王黨の遺骸が復活して舊き政治を繰返した、而してもンク將軍は蘇國よりトヰード河を渡り來つたが、其結果は人の皆知る處である。

結果は甚だ痛ましいが、我等は結果については爭ふまい、以後二百年の僞善時代も、天の意とあらば全く無益ではあるまいと思ふ、我等の僞善世界も惡夢の如く消え去りて、我等は醒めたる眼を以て自己の住む世界の大に擴げられたるを見る時が來るであらう。清教主義が何故續かないのであるかと問ふか、我友よ、清教主義は決して〳〵完全なる宇宙觀ではない、廣大なる宇宙は清教主義を以ては

盡きない、之は其一部分たるのみである、オリヴー・クロムエルが爲したよりも更に偉大なる事が、我英國に起るべき運命を持つて居るのであらうと、余は希望を以て想ふ。我等は運命と爭はない、唯之が成就を願ひて全力を以て進むのみ。

ヒューイットやスリングズビーが斷頭臺で頭を失つた此六月の頃、かの英佛聯合軍にて攻擊せしダンカークは立派に陷り、西班牙兵は立派に敗れた、海外に於ける勝利は守護官に新たなる光明を投じた。佛よりは祝賀の意を表するために使節が來て、其行列などが大に怠惰な群衆の注意を牽いたが、我等にとつては其んなことは如何でもよい、若きルイ十四世は、若し病氣に罹つて居なかつたら來る筈であつたとか。

議會が卒急に解散せられたので、守護官は財政問題については少しく間誤ついたが、其他の政務は凡て旨く進んで、國の内外に於て事は次第に改善に向つて進んだ、復又彼は清教的英國(ピューリタニックイングランド)を救ひ、復又彼は國内國外に自己の剛强を示した。彼は清教的英國にもつと好意を有する新議會を召集せんとの意向を有して居た、議會があらうが議會がなからうが、議會以上の或者に承認せられて居る清教福音主義(ピューリタンゴスペルコ)は、クロムエルに生命のある間は、決して沈淪しないのである、オリヴー・クロムエルの頭が低く下るまでは、英國の清教主義は如何なる被造物にも頭を下げないのである。清教主義は足下に怪物の頸(くび)を踏まへて、開きたる聖書と劍とを携へて立ち、敢然として此世に面するのである、これが此場所、此時に於てのオリヴー・クロムエルの使命である、高貴にして危險にして難澁なる使命――彼はいみじくも之を就(な)せしよ。而して之を終へ之より名譽を以て解放せられんとする時期は、今や間近く來らんとする。

## （一六）書翰第二百廿五

アルプス山中の新教徒は再び迫害を受けた、守護官は國内頗る多事なるにも係らず、之等憫れむべき山間の新教徒を忘れ得なかつた、因てダンカーク攻撃中なる駐佛大使ロックハートに次の書翰を送つた、秘書官サーローに口授して書かせたものであるが、其一部はサーローの筆に成るかも知れぬ、左かし全然オリヴーの心志をあらはす手紙である。――これで愈々クロムエルの書翰も終るのである。

貴下よ、

ピーエモーン州の新教徒の苦難については、曾て貴下より度々佛王に申し出づる處あり、佛王も大に之に同情を表し、サヴォイ公をして彼等山中無辜の民に前同様の住地と權利とを與へしむるやう、



充分盡力すべき意志を發表せられたる次第にて候、貴下が既往の御盡力については余等の最も滿足する處、然るに今日彼等山中の民に對する迫害また〳〵起り、彼等が苦難は日に〳〵增大する由の報知に接し、哀憐の情に堪へざるまゝ、茲に貴下に對して彼等の窮狀を御知らせ致す次第にて候、願くは彼等の苦難の一方ならざるを充分に知悉して、佛王に對して最も力强く之を御訴へ下されれ度候。

第一。彼等（サヴォイ公に隨ふ役人）はサンギオヴェに於ける公けの禮拜を悉く禁止致候、而して此命令に從はざる住民は峻酷なる審問と刑罰とを受け申候。

第二。山中の住民間には牧師職に適する者少くして全教會の半を充たすに足らざるため、佛蘭西やジェネヴァより牧師を招聘せざるを得ず候、茲に於て彼等〔敵〕は羊群の牧者を放逐して、狼〔舊

教の惡傳道者）を入れて羊を屠らしめんと謀り候。

第三。又彼等は新教の醫師が此山中を訪ふを嚴重に禁止致候、かくして彼等は靈の糧を剝ぎて住民の靈魂を飢餓に瀕せしむるのみならず、神の人類に與へ給ひし醫療の道を斷ちて住民の肉體を損せんと謀り申候。

第四。　又住民は四隣の舊教徒と商賣交易を禁せられたるため、生活の途に窮する始末、さりとて少しにても此禁を犯さば忽ち逮捕せられ申候。

第五。其上彼等は住民を强ひて其土地家屋を四隣の舊教徒に賣らしむるやうの法令を發布しながら、舊教徒は不動產を新教徒に賣るを禁ぜられ居り、之に背くものは破門せらるゝ次第にて候。

第六。加之、サヂイ公は契約に背きて再びラトレに要塞を起し、司令官を置きて之に全權を與へ居り候へば、如何なる横恣非道が行はるゝか、想像に難からず候。

第七。近頃山中に步騎數隊送られたるため、住民は虐殺を虞れて、婦人、小兒、病者等を佛王の領地なるペローザの溪谷に送るの煩勞に會し申候。

以上の如きが實に彼等憐れなる民の目下の實狀にて候、貴下が佛王に之を訴へ、佛王をして速かにサヂイ公に談判を開始するやう慫慂なし被下度候。

最も有効なる救治策は、佛王がかの溪谷をサヂイ公より買ひ取る（他の地を以て之と交換する）ことにて候、これ多くの點に於て佛王に甚だ有利ならんと存候。

上述を以て余等の意向は明瞭ならんと存じ候につき、此上の驅引は一切貴下に御任せ申候、以上。

一六五八年五月廿六日、白館（ホワイトホル）に於て

駐佛大使サー・井ルヤム・ロックハート殿　守護官オリヴー

ロックハートは此頃は大使と將軍を兼ねて、ダンカーク攻擊中であつたが、此手紙の達かぬ中に此攻城戰に首尾よく成功した、それで佛の王も首相も大に喜んだこと故、ロックハートの道理ある提言を拒むことはなからう、此後溪谷の民に對する迫害の噂は一向に聞えなくなつた。

## （一七）守護官の死

オリヴー・クロムエルの書翰も演說も之で終りである、去る二月四日に第貳議會に向つて述べたる「願くは神、諸君と余との間を審判き給へ」と云ふ結尾の語が、演說者としてのクロムエルの最後の語であつた、これ運命が定めた處であつた。

此頃將校士官に對して述べたる「二時間の演說」と、倫敦市長及び市會議員に向つてなしたる演說とは、共に遺つて居らぬ。又ヲリック伯に其孫なるリッチ氏の逝去について哀悼狀を送つたが、之も遺つて居らぬ、此リッチ氏は四ヶ月前にクロムエルの女フランシスと結婚したばかりであるのに、議會解散の十二日後に長逝した、クロムエルが擾亂の生起を遮らんと努力せる間、彼の家庭は暗黑の鎖ざす處となつた、フランシス・クロムエルが十七歲にして寡婦となつたのは、痛ましき限りである。クロムエルの「時期に適せる同情の手紙」に對して、ヲリック伯より謝狀が來たが、此老伯爵も後間もなく彼世の人となつたので、クロムエルは悲哀の上に悲哀の重なるのを感じた。かくてクロムエルの演說も手紙も最早遺つて居らぬ、

彼の語つた事も爲した事も、乃至彼の大使命を語る彼の奮鬪も――茲に所謂終焉を告げたのである、此一六五八年の夏こそは、此世に於ける彼の最後の奮鬪の時であつた、此のち彼は久遠の世界に入りて其處に休息したのである。

去る四月滿五十九歳に達したる彼は、齡の割合に若く、尙ほ强壯に見えた、「われ等が年を經る日は七十歳に過ぎず」〔詩篇第九十篇十節〕と詩人は限つた、人も我もクロムエルに尙ほ十年の命あらん事を豫期したであらう、もし彼にして尙ほ十年生きしならば、英國後世の歷史は大變動を經たであらう。さかし事はさう行かなかつた、彼の健康は昨年の春以來甚だ不安全であつて、時々不快の事があつた、彼の生活は彼の健康のために良くなかつた、「人には重過ぎる責務よ！」と彼は時々言ひ度かつた。心勞、苦難、激鬪、悲痛の二十年は彼の健康に響いた、彼の强剛なる生命力も次第に衰へたのであつた、目には高き塔――さかし土臺は朽ちて居る、一指一度觸れなば其倒壞は急遽として起る。

佛の特使未だ退かざる時、クロムエル一家の居所たるハムトン宮殿に於ては悲痛な光景があつた、即ちクロムエルの愛娘エリザベス・クレーポールは前より病氣にかゝつて居たが、此頃危篤となつたのである。ハムトン宮は此六月は悲みの家であつた、死の神は賤が伏屋をも訪ひ此宮殿をも訪ふのである、痛ましき病よ！　母も良人も姉妹も泣いて彼女の床に侍し、若きフランシス女は新たなる涙をもて喪服をうるほしたことであらう。クロムエルは十數日を彼女の枕邊に送つて、公事を見ることも出來なかつた、「我子よ、靜穩なれ、尙ほ神を信せよ、暗き河にも助けの神は居給ふ」と彼は彼女を慰めたであらう。八月の六日に彼女は遂に世を去つて永久の休安に入つ

た、あゝ我子取り去られ我れ之を悲むや切なり、主與へ又主取り給ふ、主の名の讃美すべきかな！

彼女の死する少し前、ハムトン宮にてクロムエルも少し病んださうである、エリザエス女の死は彼に絶大なる悲痛を與へたやうである、實に之は彼にとつて大打撃であつたのである。

又彼は彼女の死後數日にして、體の具合宜しからず、寢室にありて腓立比書の次の數節を讀んで貰つた。

われ乏しきに因りて之を云ふにあらず、そは我れ如何なる樣に居るもそれをもて足れりとすることを學べばなり、われ貧賤に居るの道を知りまた富に居るの道を知り、飽くことも飢うることも、豐むことも歎きことも、凡ての事に於てわれ之に熟練せり、我は我に力を與ふるキリストに因りて凡ての事をなし得るなり（四章十一節―十三節）。

之を聽いて後彼は云ふた「長子ロバートが死んで自分が大悲痛にうたれた時、曾て此聖語が自分を救つた」と。そして自ら十節十一節を復誦して後「パウロよ、汝は之を學び得しも、我には之は難い、あはれなる我よ」と呟いた、さかし誦し進んで「我は我に力を與ふるキリストに因りて凡ての事をなし得るなり」の語に至るや、彼の信仰は働き出し、彼の心は支持と慰藉を得、彼はかく獨語した、「パウロの基督は亦わが基督なり」と、かく彼は救ひの泉より水を汲み得た。

此頃クェーカー派の宗祖なる例のヂョージ・フチックスが、クロムエルに第三回目の訪問をなしたが、フチックスは「彼は死者のやうであつた」と記して居る。

一六五八年八月二十日の金曜日には、クロムエルの體は大分良いやうに見えたが、翌日には發熱して病勢の險惡を示した、土曜日よ

り火曜日まで病熱の工合が惡くなるばかりなので、醫師は白館（ホワイトホール）に移ることを忠告した、けだし白館の方が空氣が良好なのである、それ故クロムエルは火曜日〔二十四日〕にハムトン宮を去つたが――再び之を見なかつた。

彼の病險惡なりとの報は全國に傳はりて、病氣平癒を祈るものは數へ難く多かつた、公の祈禱會は澤山に開かれ、私かに獨り祈れる人も多かつたであらう、倫敦に於て又地方に於て、多くの立派なる人々が心情を盡して祈つた、彼等はクロムエルの高貴と、其清教主（ピューリタニズム）義のために缺くべからざるを知つて居た。古への勇敢なる人々が、大感情と大熱情とを抱き大なる敬虔の態度を持して天に訴へた其委細は、時の呑む處となつて今や知るに由ない。――げに此古き白館内に於てクロムエルの終焉に近づきつゝあるは、世界歴史の大なる一幕であつた、オリヴー・クロムエルと英國清教の退去――天體の如き光明が死の雲に入るに比すべく、赫々たる夏の太陽が其進路を終へて西山に春（うすつ）くに譬へつべくある。「偉人かく死す、まことに崇（あが）むべき光景よ！」とシルレルは云ふた、偉人クロムエルは神命のまにまに、凡ての勇者の死せし如くに死した、病苦は十日間續いて人は或は望み或は嘆れた、茲に少しく其有樣を記して、我等のつまらぬ傳記を了へよう。

クロムエルは此病中に「契約」と云ふ語を度々吐いた、新舊二つの契約があつて、舊約は行に缺點あれば救はれずと云ふ刑罰のそれで、新約は測り知るべからざる恩惠のそれである、永遠の神が人と立て給ひし契約である、而して此二つの契約はキリストの死に因りて一つに歸したのである――茲にクロムエルの信仰の根本が在つた。病中に彼はこんな言を發した「二つ、然れども世界の創始以前に一

に合せり」と、又「そは神聖にして眞實なり、そは神聖にして眞實なり、そは神聖にして眞實なるものとせしぞ、これ契約の仲保者なり」と、又彼は曰ふた「契約は唯一つなり、此契約に於ける信仰が我唯一の支柱なり」と、妻子が泣いて彼の床を圍んだ時彼は曰ふた「此世を愛する勿れ、敢て言ふ、此世を愛するは善からず」と、又曰ふた「子等よ、基督信者らしく生きよ、契約を以て靈を養へ」と。然り我勇敢なる人よ、契約――契約の永遠の精神――は凡ての信者の疑はざる所、此世界の基礎よりも深くして、早く存し、より永く續く。

尙ほ次の如き語を彼は發した、恰も死の黑雲を通ほしてひらめく生の光輝の如くである、「人は何事をも爲す能はず、神は其欲する處を爲し給ふ」と、又「主よ、われ若し生きんことを願はんか、これ一に汝の榮光を輝かし汝の聖業を示さんためのみ」と、又彼は「活ける神の手に陷るは畏るべき事なり」（希伯來書第十章卅一節）と三度も繰返して云ふた、永遠の國を望み見て彼は此言を三度も繰返したのであつた。かくて又彼は曰ふた「神の凡ての約束は彼（キリスト）の中にあり、然り彼に在りアーメン」と、又曰ふた「主は我靈をしてその赦免と聖愛とを充分に信せしめ給へり」と、又「余は最もつまらなき者なるが、神を愛す、むしろ神に愛せらる」と、又「余は余に力を與ふるキリストに因りて勝利者なり、勝利者以上なり」と。

かくて死生何れとも分ち難くして最後の重き日々は過ぎた、信心深き人々は祈禱の効果あるべしと信じた、いよ〳〵の最期まで希望は多くの人の心に存した。

八月三十日（月曜日）は終日暴風が吹きあれた、狂風（はやて）の音は病室にても能く聞えた。此日サーローは一人の官吏と共にクロムエルの

室に入りて、閣下萬一の場合には誰か後繼者たるべきかと問ふた、後繼者の名は既に一年前に記し、封に收めて某處にありとの答を得て、探したが一向見當らぬ、誰人にか盗まれてしまつたのであらう。多分リチャードと記してあつたのだらうと云はれて居る、クロムエルは當時尙ほ十年位は餘生のあることゝ思つて居たので、其頃にはリチャードはもつと立派な人間になると期したであらうか、或はフリートウッドと記してあつたのかも知れぬが、誰人にも正確にはわからぬ。それで翌火曜日の夜サーローより直接の返答を望まれて、「リチャード」と答へたと云ふ話である、なんだか少し不確實であるが、とにかく此答は英國將來の歷史に影響した重大なる返答である。

右の暴風の夜であらうか、クロムエルは死に先だつ二三日にして次の如き祈禱をしたのを、傍人が聞いて之を筆にして遺した。

主よ、われは賤しき漢子なれど、恩惠の下に汝の契約に與る、われは汝の民のために汝に求めんとす、汝は價値なき我を用ひて多少の善をなすの器具となし給へり、我が死を喜ぶものもあれども、われに過大の價値を附するもの多し、主よ、汝われを取り去り給ふとも、彼等を忘れ給ふ勿れ、彼等に一貫せる判斷と、同心と相愛とを與へ給へ、而して彼等の救拯を續け給ひ、改革の業を續け給ふて、キリストの名を世界に輝かし給へ、汝の器具を過重する者を敎へて汝自身にたよらしめ給へ、余の遺骸をふみにじらんとする者を赦し給へ、彼等も亦汝の民なり、キリストのために、此愚かなる短き祈禱を受け入れ給へ、而して聖旨に適はゞ、我等に良き夜を與へ給へ、アーメン。

此頃守護官の病床に侍し、後之が回想を筆に遺したハーエー氏は曰ふ、『之に記した祈禱は彼の祈禱の全部ではないとするも、少くと

も之等が彼の祈願であつたことは明かである、彼は神と國民とに對する想念に溢れて――敵に對してさへも慮る處ありて――家族や親戚のことを忘れたと見える』と、げに注意すべき一條である。

木曜の夜此ハーゼー氏はクロムエルに侍して、其模樣を筆にして居る、之を引用して急ぎ此傳記を了へよう。翌金曜日は九月三日で、ダンバー及びウースターの戰勝を紀念する感謝祭日として守り來つた日である、其前夜勞れはてし病人が苦しき息の下より發せし語は何ぞ？

『守護官は「寔に神は善なり、實に神は善なり、彼は余を棄て……」と云ふて語が塞がつた、「棄てざるべし」と云ふつもりであつたのであらう、「神は善なり」と彼は時々繰返し、病苦の中にあつても、此語を繰返す時は快活且熱心を以てした、又「余は尙は生きて神と民とのために働くを願はず、さは云へ我使命は終れり、然れども神は其民と共にあり給ふべし」と云ふた。』

『彼は此夜安眠せられなくて、時々獨語を云ふた、誰かゞ何か飲料を持つて來て「之を呑んで力めて御眠みなすつては如何です」と勸めたが、彼は「飲むことも眠ることも私は願はない、私は急ぎ逝かんことを願ふのみ」と答へた。』

『曉方に及びて彼は種々信仰的の語を發し、內心の平和と慰藉とを示した、中には甚だしく己れを責むる語もあつた、神のための公的精神が、死に際しても彼の裏に燃えて居たのである。』

翌朝の日は麗かに上つたが、オリヴーは既に言語を發せぬ人であつた、そして午後三時と四時の間に彼の英魂は地を離れた、時は一六五八年九月三日、金曜日であつた。フハウコンベルグ卿（クロムエルの女メリーの良人）はヘンリー・クロムエルに書き送つた「萬人の吃驚絕大にて候、彼等の心は全く沈み果て候、哀れなる我妻――小

生はほと〳〵困り入り候、少しく鎮まりしかと思へば、復又腸もちぎれるばかり慟哭致候」と。泣くを休めよ、憐れなるメリーよ、汝が父の戰は立派に爲し遂げられしなり。

『主にありて眠りし死者の福ひなる哉』、主に在りて生きし勇者の福ひなる哉、『聖靈アーメンと曰ふ』――アーメン、『彼等は彼等の勤勞より休む、されど彼等の所爲は彼等の後に續かん』。

「彼等の所爲は彼等の後に續かん」と、既往に於ても現時に於ても、げにオリヴー・クロムエルは然うである、彼の事業は彼死して殘り、彼に代はりて此世に生續するのである。人間の仕事は――之を何處に埋めるとも――亡びない、亡ぶることは出來ない、一人の人の中に在りし義勇事と永久的光輝とは、極て確實に永遠其者に附加せられ、神聖なる新根本眞理として殘る、そして梟が如何な聲を立てゝ騷がうが、之を妨ぐることは出來ぬ。

* * * * * * * * * *

オリヴーは去つた、そして彼の熱心に建設せし處の、當時に於て驚かれ以後に於て忘れられざる、光明赫々たる英國清教主義は彼の去ると共に去つた、清教主義は其王を失ふて無政府となり、躓き、蹌踉き、ます〳〵無政府的混亂に陷つた、而して清教信仰の擁護者は最早現はれぬ、英國の精神が天に登る鷲の如く世を睥睨して高く冲すると云ふことは最早ない。今や英國の精神は夢中になつて食物に取附いて居る駝鳥に酷似だ、駝鳥が尻の方を天に冲して頭を藪につき込んで、之で安心だと思ふて居るやうに、僞善的の形式の中に首を突き込んで、天の方へは更に頭を擡げない、駝鳥の運命がわかつて居るやうに英國の運命も知れて居る、地上の食物を貪るに熱中して、虚僞の藪に頭をつき込んで居る駝鳥は、いつかは目が醒める

守護官の死

にきまつて居るが、その時はもう遲からうよ、間に合ふまいよ。此時來らざる前に醒めよ、神人ともに我等に覺醒を促す、我等の祖先も亦一同大聲疾呼して「醒めよ、醒めよ」と我等を促す。

# クロムエル傳　大尾

## クロムエル年譜（其三）

| 時 | 事 | 況 |
|---|---|---|
| 一六五四年 | 一月以來種々の陰謀起りてクロムエルの政府を脅す。<br>四月、諸外國との條約成る。<br>九月三日より第壹守護官政議會開かる。<br>議會は政府を認むべきか否かの討論に耽りて日を送る。<br>十二月、英の新海軍は西印度に向ふ。 | 三月發布の第一法令に依りて宗教政策を確立す。<br>九月四日議會に大演說を試む。<br>九月十二日議員に對して政府承認の署名を求む。<br>十一月、母を喪ふ。 |
| 一六五五年 | 種々の騷亂陰謀は未だ歇まず。<br>一月、議會解散せらる。<br>五月、騷亂一先づ歇みて國內鎭靜す。<br>六月、アルプス山中の新教徒迫害せらる。 | 正々堂々たる理由を發表して議會を解散す。<br>アルプス山中の新教徒の爲に圖る。 |

| 時 | 歴史 | 注 |
|---|---|---|
| | 此年ブレークは地中海附近に游弋して活動す。 | |
| | 六月、ヘンリー・クロムエル愛爾蘭駐屯軍少將に任ぜらる。 | |
| | 八月、英蘭に都督制度布かる。 | |
| | 八月　遣西艦隊はテヤマイカを占領したるのみにて大體に於て失敗す。 | |
| | 十一月、貿易會議開かる。 | |
| 一六五六年 | 六月頃よりチャールズは西班牙の後援を得て英に侵入せんとす。 | 息ヘンリーを愛蘭に遣して軍隊を指揮せしむ。 |
| | 九月、第貳守護官政議會の第一會議開かる。 | 西印度遠征に失敗して毫も屈せず。十一月以降、佛と結びて西班牙を挫くことに益々努力す。 |
| 一六五七年 | 三月、議會は『請願及び建議』の名に於て新政制案をクロムエルに呈す。 | 五月、葡萄牙を屈服さす。議會に於て激勵の大雄辯を揮ふ。 |
| | 四月、ブレークはサーンタクルースの灣に大に西班牙の艦隊を破る。 | 四月、『請願及び建議』に關する諮問會議を開く。 |
| | 六月、正式の守護官就任式行はる。 | 五月、『請願及び建議』中の王號を稱する項を拒否し上院新設等の項を容る。 |
| | 六月、議會閉院せらる。 | 六月、更て正式に守護官に就任す。 |
| | 六月以降、英佛聯合軍は和蘭地方に西班牙の根據地を攻擊す。 | 佛と結びて西班牙を懲らさんと計る |
| 一六五八年 | 一月、第貳守護官政議會の第二會議召集せられ、新たに上院成る。 | 一月廿五日、議會に大熱辯を揮ひて國情を訴ふ。 |
| | 內憂外患は未だ已まずして、議會が空虛なる討論に耽るに乘じて益々其勢威を增さんとし危機迫る。 | |
| | 二月、議會解散せらる。 | 二月、議會解散を命じ、陰謀の爆發を抑止し益々努力して善政を施す。 |
| | 以後、國內鎭まり强健なる施政行はる。 | 五月、復又アルプス山中の新敎徒のために圖る。三月より八月まで家庭に不幸續出す |

| 時 | 事 |
| --- | --- |
| | 九月三日、ダンバー及びウースター戰勝記念日に於て逝く。 |

クロムエル年譜 終

大正三年五月十六日印刷
大正三年五月十九日發行

定價六十錢

翻譯者　畔上賢造

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

横濱市太田町五丁目八十七番地
印刷者　村岡平吉

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　警醒社書店
振替東京五五三（電新一五八七）

不許複製

内村鑑三先生
畔上賢造先生　共著

# 平民詩人

■定價五十錢
□郵税金六錢

（各詩人肖像入）

歐米の數ある詩人中、ホキットマン・テニスン・ローエル・ホキッチヤ・ウチルヅオス・ブライアントの六詩星を撰むで、其生涯と、思想と、重なる作品とを紹介し、評論す。紹介は專念その根本思想、特異色を失はざらむことに努めたれば、各詩人の眞面目は紙上に躍如たり。自由の空氣、純潔の思想、清高の情緒は卷中に溢る。あはれこゝろある人よ。來りて平民詩人と共にうたひ、與に叫びたまへ。

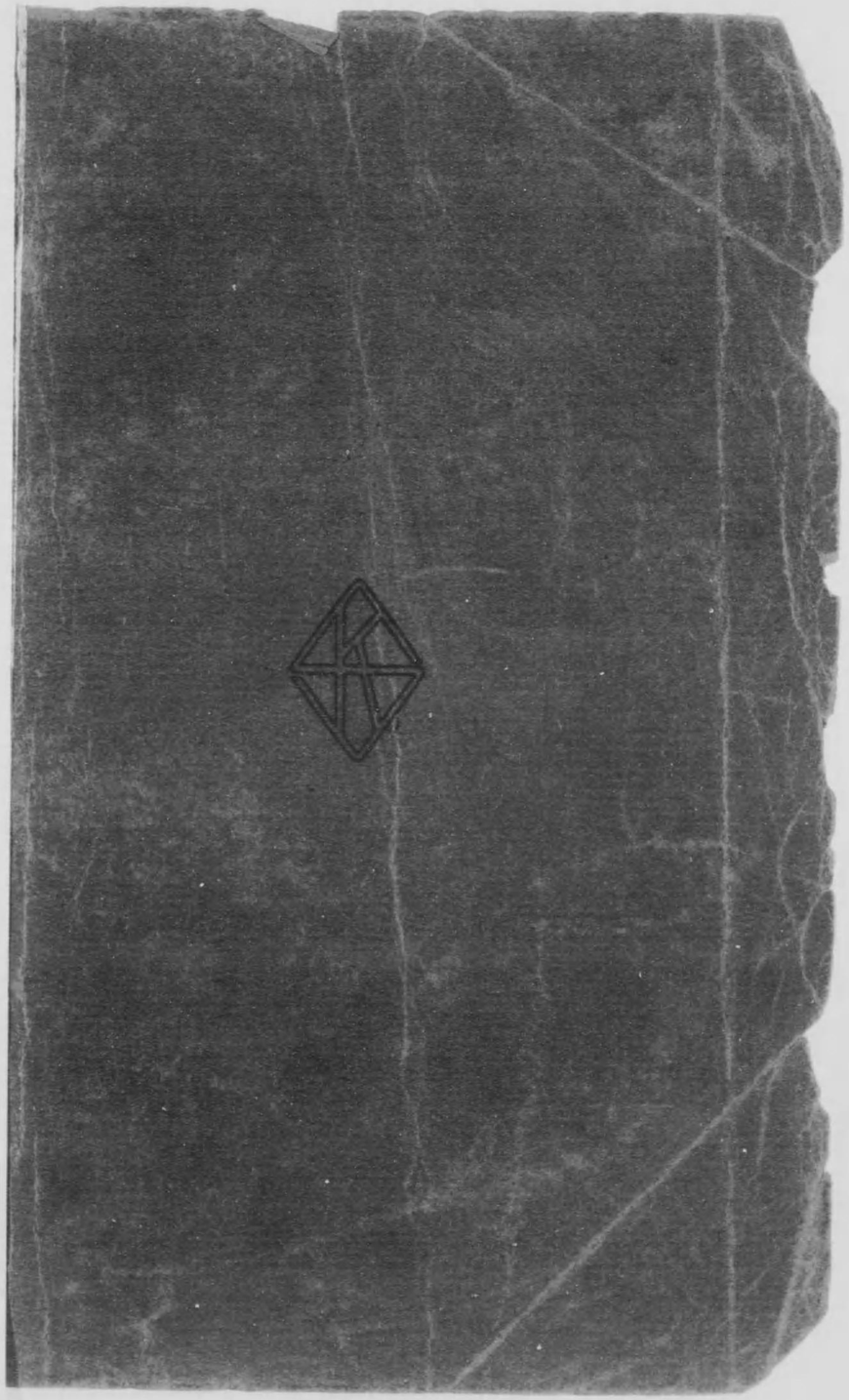
■畔上賢造先生譯

ヘンリ・ドラモンド著　人間上進論（再版）　定價五十錢　郵税金六錢

トマス・カーライル著　クロムエル（上卷）　定價六十錢　郵税金六錢

同　クロムエル（中卷）　定價六十錢　郵税金六錢

同　クロムエル（下卷）　定價六十錢　郵税金六錢

289
C93
2(3)

終